学齢期の難聴児における言語情報と感情情報の一致・不一致の判断：
視覚情報と聴覚情報の比較から

○笹目友香¹⁾，小渕千絵¹⁾，城間将江²⁾，野口佳裕³⁾

1) 国際医療福祉大学 成田保健医療学部 言語聴覚学科，

2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科，

3) 国際医療福祉大学 医学部医学科 耳鼻咽喉科学

【目的】

私たちのコミュニケーションでは通常、発する言語情報と感情情報は一致している。しかし、皮肉や冗談など、あえて言語情報と感情情報に矛盾を生じさせ、話者の複雑な心境を表したり、相手とのやりとりに楽しみを加えたりすることがある。難聴児は皮肉や冗談を理解しにくいとされるが、視覚情報を使用した場合には結果が異なる可能性がある。本研究では、聴覚障害児の言語情報と感情情報の一致／不一致の判断について、視覚情報と聴覚情報による差について検討することを目的とする。

【方法】

対象：学齢期の難聴児4名（小学1～5年生、人工内耳（CI）装用児3名、補聴器（HA）装用児1名、語音明瞭度（補聴機器装用下）：18～88%）、対象児とはほぼ同年齢の聴児9名（1～6年生）とした。課題：パソコンから提示される刺激に対し言語情報と感情情報の一致／不一致の判断を求めた。刺激：言語情報は肯定的（例：すごい）、否定的（例：やめて）の2種各5語、計10語とし、感情情報は肯定的（笑顔／明るい声色）、否定的（怒り顔／怒った声色）の2種とした。刺激語10語について、肯定／否定の組み合わせで一致／不一致を設定し、計50試行とした。刺激提示：刺激はパソコンよりランダムに提示し、ボタン押しにより一致または不一致の反応を求めた。聴覚刺激は補聴機器装用下で被検児の快適レベルにて、スピーカーより提示した。手続き：視覚刺激課題では、吹き出し内のセリフの意味内容（言語情報）とイラストの表情（感情情報）とが一致していれば○、そうでなければ×を、聴覚刺激課題では刺激課題と同様の方法で、内容の言語情報と声色による感情情報との一致／不一致の判断を求めた。練習課題で教示理解を確認した後、本課題を行った。分析方法：各児の正答率を算出し、健聴児と聴覚障害児を比較した。さらに、聴覚障害児の結果について聴力や補聴機器、言語検査結果と併せて検討した。

【結果】

視覚刺激課題の正答率は、すべての健聴児が90%以上、聴覚障害児は86～100%であった。聴覚刺激課題の正答率は、健聴児は1名を除き90%以上であった。聴覚障害児では、CI児1名について、課題実施中に首をかしげて検査者を伺う様子が頻回に見られたため、課題遂行は過度の負担を与えると考え検査を中断した。検査を完遂した3名の正答率は52～96%であった。この3名について、HA装用児（中等度難聴）は健聴児と同程度の成績を示した。一方、CI装用児2名は健聴児に比し低い結果となった。HA装用児は視覚刺激と聴覚刺激が同程度の成績であり、CI装用児2名は視覚刺激が聴覚刺激に比し良好な成績を示した。また、聴覚刺激課題においては、不一致条件に比し一致条件の正答率が高かった。

【考察】

聴覚障害児4名について、視覚刺激の一致／不一致判断は健聴児と同程度の成績を示し、言語情報と感情情報の一致／不一致に対する判断は可能であることが示唆された。一方聴覚刺激では、課題を実施した聴覚障害児3名のうち、中等度難聴であるHA装用児は健聴児と同程度の成績、CI装用児は健聴児に比して成績は低く、CIはHAに比し、F0の情報伝達が不十分であることによる（喜屋武・濱田、2018）と推測された。また、聴覚刺激課題の実施が困難であったCI装用児1名は語音明瞭度が低いことから、言語情報、感情情報ともに聴取が難しく検査遂行に困難を示した可能性が高い。加えてPVT-Rの評価点が低く、獲得語彙の乏しさが教示理解の曖昧さや正答率低下の要因となっている可能性も否めない。語彙力の低い児に対しては教示の難度や理解程度に影響を受けやすい行動学的評価だけでなく、それらの影響を抑えることが可能な生理学的評価の実施についての検討も有用であると考えられる。最後に、今回の結果より、CI装用児における皮肉や冗談など言語情報と感情情報の不一致の知覚には、視覚等他の情報入力回路を活用することの重要性が示唆された。

【文献】

喜屋武 睦、濱田豊彦. 聴覚障害児の韻律聴取能力と聴覚機能との関係に関する検討. Audiology Japan 61, 546-554, 2018